

8. 柔道の授業における絞技の 教育効果に関する研究

びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部 林 弘典
大阪教育大学教育学部 石川 美久
大阪体育大学体育学部 生田 秀和

キーワード：武道、柔道授業、絞技、送襟絞、教育効果

8. Study on the Educational Effectiveness of Strangling Techniques in Judo Classes

Hironori HAYASHI (Faculty of Sport Study, Biwako Seikei Sport College)
Yoshihisa ISHIKAWA (Faculty of Education, Osaka kyoiku University)
Hidekazu SHODA (School of Physical Education, Osaka University of
Health and Sport Sciences)

Key words : *Budo*, judo class, strangling techniques, *Okuri-eri-jime*,
educational effectiveness

Abstract

This study aimed to examine the educational effectiveness of strangling techniques in judo classes. A survey was conducted for 160 university students who had attended a judo class at a physical education teacher training university in the Kansai area, after the students had been taught a strangling technique (*Okuri-eri-jime*). The results revealed the following.

1. Many respondents (115; 71.9%) answered that they enjoyed learning strangling techniques.
2. Many respondents (128; 80.0%) answered that learning strangling techniques was difficult.
3. Many respondents (128; 80.0%) answered that they could safely perform *Randori* incorporating strangling techniques.
4. Many respondents (112; 70.0%) answered that they enjoyed *Randori* with strangling techniques.

5. Most of the respondents (155; 96.9%) answered that they could understand the dangers of strangling techniques.
6. Many respondents (141; 88.1%) answered that it was painful when they were taught strangling techniques.
7. Most of the respondents (152; 95.0%) answered that they could understand the pain and suffering of others through the study of strangling techniques.
8. Most of the respondents (157; 98.1%) answered that through the study of strangling techniques, they could understand that judo has aspects of martial arts (to kill and injure people).
9. Many respondents (134; 83.8%) answered that strangling techniques were useful for self-defense.
10. Many respondents (142; 88.8%) answered that there was a need to learn strangling techniques to understand human pain and suffering and that judo has a martial arts (killing and injuring people) aspect.

These results suggest an educational effectiveness of strangling techniques in judo classes. It is necessary to verify whether learning strangling techniques can enhance the ability to consider the opponent's position and act accordingly. As some participants did not believe or understand the educational effectiveness of strangling techniques in judo classes, it is necessary to carefully consider the introduction of strangling techniques in judo classes at junior high schools and high schools in the future.

I. 緒言

中学校と高校の学習指導要領（保健体育）では、安全上の理由から絞技と関節技は禁じ技とされているために、生徒は学習することができない（文部科学省, 2016, 2017）。しかし、中学校あるいは高校で柔道の授業を経験した大学生72名に絞技や関節技の学習体験を調査した結果、約6%の者が絞技や関節技を学習したことがあると報告されている（生田ほか, 2021）。どのような意図で絞技や関節技を学習させたのか、どのような教育効果があったのかは明らかにされていない。また、絞技や関節技を学習したいかという質問に対し、男性は否定的な考えが多く、女性は肯定的な考えが多い傾向にあると言及されている（林ほか, 2021）。これらの事実から、絞技や関節技に教育効果があるのかどうかを検討する必要がある。

中学校と高校の柔道の授業における固技の学習では、抑技のみが取り扱われており、主に3種類の技（袈裟固、横四方固、上四方固）が指導されている（文部科学省, 2016, 2017）。固技は抑技（10種類）、絞技（12種類）、関節技（10種類）の3つに分けられ、計32種類の多様な技が存在する（講道館, online 1）。したがって、中学校や高校の柔道の授業における固技の学習では、3つの技術体系のうち1つしか体験していないことになる。これでは固技の技術体系全体を理解したとはいえ、柔道を理解したとは言い難い。固技の技術体系を正しく理解するためにも、十分に安全配慮をした上で絞技や関節技の体験だけでも行わせる必要があるかもしれない。

一般的に首を絞めたり、肘関節を捻ったり伸ばしたりすることは危険であり、怪我が多発すると推察される。しかし、柔道の傷害では、投技による捻挫や打撲、骨折などの傷害が圧倒的に多

く、固技による傷害は皆無に近い（JAPAN SPORT COUNCIL, online）。近年では、投技による脳震盪を含めた頭部外傷が深刻な問題となっている（内田, 2013；全日本柔道連盟, online）。その中の重大事故として、2019年に小学生2名が投げられて急性硬膜下血腫となり、1名が死亡している（全日本柔道連盟, 2019）。したがって、固技は投技よりも傷害のリスクが極めて低いことが理解できる。このことから、絞技や関節技に教育効果が認められれば、中学校と高校の柔道の授業において、安全に配慮した上で取り入れることは可能であると考えられる。

絞技や関節技の教育効果について、①絞技と関節技の学習は、投技や抑技よりも柔道が武技、武術（人を殺傷する技術）から発生した我が国固有の文化であることを学習者に実感させやすい、②危険な技を理解することによって、教員になった時に生徒に危険な行為をさせないように指導ができる、③柔道全体の技術を理解することに役立つ、④自分が絞技と関節技を受けることによって、人の痛みを理解することができる」と指摘されている（林ほか, 2022b）。このことから、絞技や関節技の学習は、学習指導要領における人間性を高めたり、武道（柔道）が武技、武術から発生した我が国固有の文化であることを深く理解させるなどの教育効果が期待できる。しかし、この見解は推論に過ぎず、実際に絞技や関節技を体験した者からの調査データではない。

そこで本研究の目的は、柔道の授業における絞技の教育効果を検証することとした。これによって、今後の学習指導要領（保健体育）を改定にする際の貴重なデータを収集し、柔道授業の可能性を検討することができる。なお、絞技と関節技は全く技術体系が異なり、明確に絞技の教育効果を明らかにするために、本研究では絞技の教育効果のみを検証した。

II. 方法

1. 対象者

関西地区の教員養成系大学において、柔道の授業を履修した20歳以上の大学生160名（男子126名、女子34名）を対象とした。本研究は文部科学省・厚生労働省の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守して実施した。また、原稿の記述や図・表・写真等にある個人名や地域名は判別できないように倫理的配慮を行った。なお、本研究は、びわこ成蹊スポーツ大学学術研究倫理専門委員会における研究倫理審査で承認された（成ス大第16号）。

2. 調査時期

2021年7月に、関西地区の保健体育教員養成系大学の柔道の授業において、授業担当の柔道専門家が絞技（送襟絞）を対象者に指導した後にアンケートを実施した。対象者には、研究内容について十分に説明を行い、同意を得た上でアンケートを実施した。

3. 絞技を指導する柔道専門家の能力

柔道の授業を担当した柔道専門家3名は、柔道の技術や知識、指導に精通している（表1）。彼らは、全日本柔道連盟公認A指導員や日本スポーツ協会公認スポーツ指導者柔道コーチ（1あるいは3）を有し、柔道の高段者（六段あるいは七段）である。また、全日本柔道連盟公認A審判員ライセンス、あるいは全日本柔道連盟公認B審判員ライセンスを有している。さらに、全日本柔道連盟の強化コーチや試合分析スタッフの経験がある。

表1 柔道専門家の能力について

| No. | 段位 | 指導者資格 | 審判員資格 | 日本国内の主な競技成績 | 全日本強化コーチ・スタッフ経験 |
|-----|----|---------------------------------|--------|--|--|
| 1 | 七段 | A指導員, 日本スポーツ協会公認スポーツ指導者 柔道コーチ 3 | Aライセンス | 講道館杯全日本体重別選手権大会 [†] 出場 | 全日本強化コーチ・全日本柔道連盟強化委員会科学研究部 ^{††††} |
| 2 | 七段 | A指導員, 日本スポーツ協会公認スポーツ指導者 柔道コーチ 1 | Bライセンス | 講道館杯全日本体重別選手権大会1位, 全日本選抜柔道体重別選手権大会 ^{††} 1位, 元全日本強化選手 ^{†††} | 全日本強化コーチ |
| 3 | 六段 | A指導員, 日本スポーツ協会公認スポーツ指導者 柔道コーチ 1 | Aライセンス | 講道館杯全日本体重別選手権大会1位, 全日本選抜柔道体重別選手権大会2位, 元全日本強化選手 | 全日本柔道連盟強化委員会科学研究部 |

[†]高校・大学・社会人のトップアスリートが選抜されて出場するオリンピックや世界選手権の第一次選考会

^{††}講道館杯全日本体重別選手権大会から原則的に8名が選抜されるオリンピックや世界選手権の最終選考会

^{†††}1階級に約8名が指名される日本のトップ選手であり、国際大会に派遣される選手

^{††††}国際大会の撮影や試合分析など日本代表選手をサポートするスタッフ

4. 絞技の選定

講道館の固技の分類では、絞技は以下の12種類に分けられる（講道館, online 1）。絞技の選定において胴絞を除外した。その理由は、胴絞は胴体を脚で絞めることによって内臓に負荷が加わる危険な技であり、試合で禁止されているからである。残りの11種類の技のうち、絞技を指導する柔道専門家3名が安全性の高さや技の効果を検討した結果、柔道の練習や試合で最も多用される送襟絞を指導する技とした（図1）。

(1) 並十字絞（なみじゅうじじめ）

相手の前から手首を交差させ、両手の拇指を内にして横襟を握り、頸部を圧して絞める技である。

(2) 逆十字絞（ぎゃくじゅうじじめ）

相手の前から手首を交差させ、両手の四指を内にして横襟を握り、腕を引き締めて頸部を圧して絞める技である。

(3) 片十字絞（かたじゅうじじめ）

相手の前から手首を交差させ、左手の四指を内にして相手の左横襟を握り、右手の拇指を内にして右横襟を握り、左手を引き、右手を押して頸部を圧して絞める技である。

(4) 裸絞（はだかじめ）

相手の後ろから、柔道衣を利用することなく右前腕を前頸部にあて、左手をこれに組み合わせることで頸部を圧して絞める技である。

(5) 送襟絞（おくりえりじめ）

相手の後ろから、右手で相手の頸の前を通して左横襟を握り、左手は左腋下を通して右前襟を握り、右手は右後ろ方向に引き、左手は引き下げ、頸部を圧して絞める技である。

(6) 片羽絞（かたはじめ）

相手の後ろから、右手で相手の頸の前を通して左横襟を握り、左手は相手の左腋下を通して腕を上方に挙げ、体をわずかに右に開きながら右手は右後ろ方向に引き、左手は右腕の下方に突っ込み、頸部を圧して絞める技である。

(7) 片手絞（かたてじめ）

仰向けの相手の左側から、右手の拇指を内にして右横襟を握り、手首で頸部を圧して絞める技である。

(8) 両手絞（りょうてじめ）

相手の前から、拇指を内にして、右手で相手の左横襟、左手で右横襟を握り、拳で頸部を圧して絞める技である。

(9) 袖車絞（そでぐるまじめ）

相手の前から、右前腕を相手の前頸部に、左前腕を後頸部に当てて挟み、左手で右袖口を握り、右手を相手の頸の右側へ突っ込んで頸部を圧して絞める技である。

(10) 突込絞（つっこみじめ）

相手の前から、拇指を内にして、左手で相手の右前襟を、右手で相手の左前襟を握り、右手を相手の頸の右側へ突っ込んで頸部を圧して絞める技である。

(11) 三角絞（さんかくじめ）

頸と右腋を両脚で挟み、右足を左膝裏に掛けて、三角状にして頸部を圧して絞める技

(12) 胴絞（どうじめ）

両脚で相手の胴を挟み圧して絞める技である。

5. 送襟絞の指導

講道館とは、1882（明治15）年に嘉納治五郎師範によって創設され、世界約200の国と地域で行われている講道館柔道の総本山であり、講道館柔道を指導研究教授してその普及発展を図り、国民、特に青少年の心身鍛練に貢献することを目的とした公益財団法人である（講道館, online 2）。その講道館の指導員3人が出版した指導書（竹内, 1988；醍醐, 2001；小俣, 2004）を参考に送襟絞の指導を行った。彼らは、日本はもとより世界で柔道選手を指導した豊富な経験があり、優れた指導力を有している。

対象者が絞技を学習する際に、絞技を指導する柔道専門家に加えて柔道部員の学生やSA（Student Assistant）など柔道熟練者（二段以上）を補助者として配置し、複数名体制で安全に配慮して指導を行った。また、絞技の学習者には、①技を掛ける者はゆっくりと頸部を絞めること、②技を受ける者は苦しくなり始めたら早めに「参った」の合図（相手を二度以上軽く

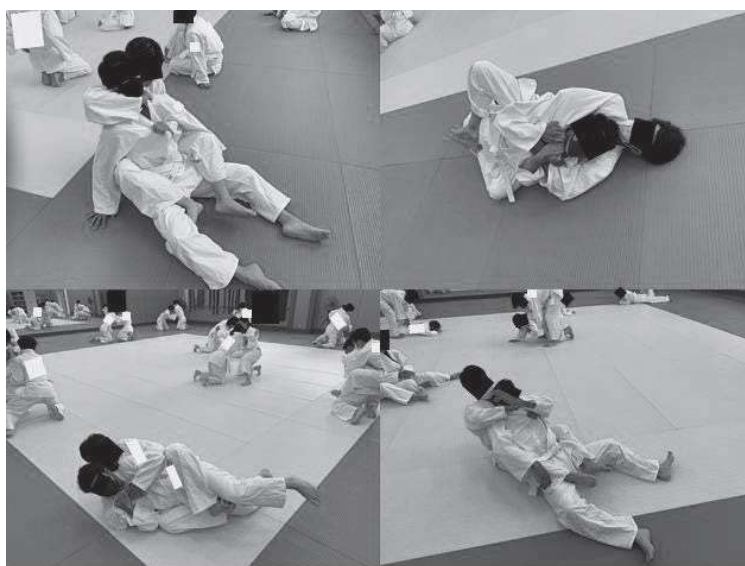


図1 絞技の学習の様子

叩く) をすること、③技を掛ける者は技を受ける者から「参った」の合図があったら、絞技を瞬時に外すことを徹底した。

対象者の中には、保健体育科教員を目指す学生も存在するために、絞技を中学校や高校の授業で指導しても良いと誤解する危険性がある。そのため中学校や高校の学習指導要領（文部科学省，2016，2017）では、絞技は禁じ技であり中学校や高校の柔道の授業では取り扱われないことを強調して説明した。

6. 質問内容の作成

柔道専門家3名が柔道の絞技における教育効果を検証するための質問内容（10問）を作成した（表2）。この資料として、「保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案（3）：大外刈り・絞技・関節技・試合の指導（林ほか，2022b）」や「武道を知る（田中ほか，2000）」「武道のすすめ（中林，2007）」を参考にした。中でも、林ほか（2022b）の論文にある絞技や関節技の指導効果に関する記述に着目した。その論文には次のように言及してある。「絞め技や関節技は柔道の技術の中にあり、学習指導要領にある武道（柔道）が武技、武術（人を殺傷する技術）から発生した我が国固有の文化であることを投げ技や抑え技よりも実感させることができるからです。また、教員養成の学生に対する授業であるために、どのような形になったら危ないのかを理解させることに役立ちます。そして、彼らが教員になって柔道を指導する際に、生徒が絞技や関節技に似たような行為をしていたら止めることができます。さらに、近年、暴力・暴言・ハラスメント・体罰・虐待・いじめ・SNSによる誹謗中傷など人に身体的・精神的な苦痛を平気で与える事件が多くなったように感じます。自分が人から痛みを受けた経験が少ないために人を傷つけてしまうことが原因の1つであると考えられます。柔道の授業において、学生がお互いに絞め技や関節技を掛けたり掛けられたりすることによって、人の痛みや苦しみを少しでも理解できるようになると思います。つまり、本学の行動指針（忠恕）である人の立場になって考え行動できることを合わせて指導しています。以上の3つの点で学習させています。なお、乱取りでも使用することを許可しています。」

7. 統計処理

柔道の絞技における教育効果を検証するための質問について、対象者は「はい」「いいえ」「分からない」の中から1つを選択した（表2）。次に質問ごとに回答者数を集計し、 χ^2 検定を行った。統計処理には、表計算ソフトMicrosoft Excel 2019を用い、検定の有意水準は5%未満とした。

Ⅲ. 結果

表2は、柔道の絞技における教育効果について集計した結果である。

No.1の「絞技の学習は楽しかったですか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（115名、71.9%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=107.0, p<0.01$ ）。

No.2の「絞技の学習は難しかったですか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（128名、80.0%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=159.2, p<0.01$ ）。

No.3の「絞技を取り入れた乱取は安全にできましたか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（128名、80.0%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=160.6, p<0.01$ ）。

No.4の「絞技を取り入れた乱取は楽しかったですか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（112名、70.0%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=97.1, p<0.01$ ）。

No.5の「絞技の危険性を理解できましたか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（155名、96.9%）が有意に高かった（ $\chi^2(2)=290.7, p<0.01$ ）。

No.6の「絞技を掛けられて痛かった・苦しかったですか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（141名、88.1%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=216.9, p<0.01$ ）。

No.7の「絞技の学習を通し、人の痛みや苦しみを理解できましたか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（152名、95.0%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=274.1, p<0.01$ ）。

No.8の「絞技の学習を通し、柔道に武術・武技（人を殺傷する）の側面があることを理解できましたか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（157名、98.1%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=184.4, p<0.01$ ）。

No.9の「絞技は護身術として役立つと思いますか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（134名、83.8%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=302.3, p<0.01$ ）。

No.10の「人の痛みや苦しみを、柔道に武術・武技（人を殺傷する）の側面があることを理解するために、絞技を学習する必要性はあると思いますか？」において、 χ^2 検定の結果、「はい」と回答した人数の割合（142名、88.8%）は有意に高かった（ $\chi^2(2)=221.7, p<0.01$ ）。

表2 柔道の絞技における教育効果について

| No. | 質問項目 | 選択肢 | はい | いいえ | 分からない | 合計 | df | χ^2 値 | 有意差 |
|-----|---|-----|------|------|-------|-----|----|------------|--------|
| 1 | 絞技の学習は楽しかったですか？ | 人数 | 115 | 24 | 21 | 160 | 2 | 107.0 | p<0.01 |
| | | % | 71.9 | 15.0 | 13.1 | 100 | | | |
| 2 | 絞技の学習は難しかったですか？ | 人数 | 128 | 24 | 8 | 160 | 2 | 159.2 | p<0.01 |
| | | % | 80.0 | 15.0 | 5.0 | 100 | | | |
| 3 | 絞技を取り入れた乱取は安全にできましたか？ | 人数 | 128 | 6 | 26 | 160 | 2 | 160.6 | p<0.01 |
| | | % | 80.0 | 3.8 | 16.3 | 100 | | | |
| 4 | 絞技を取り入れた乱取は楽しかったですか？ | 人数 | 112 | 21 | 27 | 160 | 2 | 97.1 | p<0.01 |
| | | % | 70.0 | 13.1 | 16.9 | 100 | | | |
| 5 | 絞技の危険性を理解できましたか？ | 人数 | 155 | 2 | 3 | 160 | 2 | 290.7 | p<0.01 |
| | | % | 96.9 | 1.3 | 1.9 | 100 | | | |
| 6 | 絞技を掛けられて痛かった・苦しかったですか？ | 人数 | 141 | 14 | 5 | 160 | 2 | 216.9 | p<0.01 |
| | | % | 88.1 | 8.8 | 3.1 | 100 | | | |
| 7 | 絞技の学習を通し、人の痛みや苦しみを理解できましたか？ | 人数 | 152 | 1 | 7 | 160 | 2 | 274.1 | p<0.01 |
| | | % | 95.0 | 0.6 | 4.4 | 100 | | | |
| 8 | 絞技の学習を通し、柔道に武術・武技（人を殺傷する）の側面があることを理解できましたか？ | 人数 | 157 | 1 | 2 | 160 | 2 | 184.4 | p<0.01 |
| | | % | 98.1 | 0.6 | 1.3 | 100 | | | |
| 9 | 絞技は護身術として役立つと思いますか？ | 人数 | 134 | 7 | 19 | 160 | 2 | 302.3 | p<0.01 |
| | | % | 83.8 | 4.4 | 11.9 | 100 | | | |
| 10 | 人の痛みや苦しみを、柔道に武術・武技（人を殺傷する）の側面があることを理解するために、絞技を学習する必要性はあると思いますか？ | 人数 | 142 | 5 | 13 | 160 | 2 | 221.7 | p<0.01 |
| | | % | 88.8 | 3.1 | 8.1 | 100 | | | |

IV. 考察

現在、中学校や高校の柔道の授業では、立技（手技、腰技、足技）と固技（抑技）が学習されており、絞技は禁じ技であるために生徒は学習することができない（文部科学省、2016, 2017）。また、我々の日常生活において相手の首を絞めることは犯罪であり、絶対に行ってはいけない行

為である。この行為が授業という安全が確保された中で体験できたことによって、絞技の学習を楽しむことができたと思われる。したがって、160名のうち約70%の対象者が乱取りを含めた絞技の学習を楽しむことができたと考えられる。

128名(80.0%)の対象者は技術の習得が難しいと回答していた。初めて絞技を学習する者には、送襟絞は技術的に難しかった可能性が高い。比較的簡単な裸絞を絞技の選定から外した理由は、裸絞は咽喉を手首で圧迫して苦しいというより痛いと感じせる技であり。頸動脈を圧迫して苦しさや痛さの両方を与える多くの絞技と異なるからである。しかし、本研究の結果から、絞技の体験では、裸絞を選定した方が良かったかもしれない。

乱取(自由練習)で絞技を使って楽しむことについて、「いいえ」または「分からない」と回答した者が48名(30.0%)もいたことから、今回の短時間の体験では、乱取において絞技の楽しさを理解できるまで至らなかったと考えられる。この原因も送襟絞の技術習得が困難であったことが影響していると推察される。また、送襟絞を取り入れた乱取において、26名(16.3%)が安全にできたことを判断できなかった理由も、前述と同様に絞技の技術を乱取で使いこなすことが難しかったためであると考えられる。やはり比較的簡単な裸絞を選定した上で十分な学習時間を確保して調査を行うことが求められる。

160名のうち約90%以上の対象者が絞技の体験から①危険性の理解、②痛みや苦しみの理解、③人の痛みや苦しみへの共感、④柔道が武術・武技(人を殺傷する術)から発生した歴史、これら4つのことを理解するために⑤絞技学習の必要性があると回答していた。なぜなら、絞技は投げられることや抑えられることよりも生命の危機を強く感じているからであると考えられる。なお、保健体育教員養成系の学生には、特に柔道が武術・武技から発生した文化として理解させるために、安全に配慮した上で絞技を指導しても良いかも知れない。

近年、暴力や暴言、体罰、ハラスメント、いじめ、虐待、SNSによる誹謗中傷が社会的に深刻な問題として指摘されている(林, 2017; 日本スポーツ協会, 2020)。相手の立場になって考えれば、他人に苦痛を与えることはしないはずである。絞技の学習を通して、自分の苦痛も他人の苦痛も同じであると気付かせることによって、人を苦しめ痛めつけるような言動をしてはならないことを理解できる。また、157名(98.1%)の者が、柔道の武術・武技(人を殺傷する)の側面を強く認識していたことから、学習指導要領に記述されている「武道は、武技、武術から発生した我が国固有の文化」を理解させることができると考えられる。しかし、護身術として役立つことについては、他の項目と比較して高い値にならなかった。この理由は、身を守る時に自分自身が絞技を使えるかどうか分からないからであると推察される。

本研究における短時間の絞技の学習は、相手の立場を考えて行動できるきっかけに過ぎない。今後、絞技の学習によって、相手の立場を考えて行動できる能力を高められるかを検証する必要がある。また、柔道の絞技に教育効果があると思わない者や分からない者が少なからずいたことから、今後、中学校や高校の柔道の授業における絞技の導入は慎重に検討する必要がある。

V. 総括

本研究の目的は、柔道の授業における絞技の教育効果を検証することとした。関西地区の保健体育教員養成系大学において、柔道の授業を履修した大学生160名に絞技(送襟絞)を指導した後にアンケートを実施した。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 絞技の学習は楽しかったと回答した者が多かった(115名、71.9%)。

2. 絞技の学習は難しかったと回答した者が多かった (128名、80.0%)。
3. 絞技を取り入れた乱取を安全にできたと回答した者が多かった (128名、80.0%)。
4. 絞技を取り入れた乱取は楽しかったと回答した者が多かった (112名、70.0%)。
5. 絞技の危険性を理解できたと回答した者が多かった (155名、96.9%)。
6. 絞技を掛けられて痛かった・苦しかったと回答した者が多かった (141名、88.1%)。
7. 絞技の学習を通し、人の痛みや苦しみを理解できたと回答した者が多かった (152名、95.0%)。
8. 絞技の学習を通し、柔道に武術・武技 (人を殺傷する) の側面があることを理解できたと回答した者が多かった (157名、98.1%)。
9. 絞技は護身術として役立つと回答した者が多かった (134名、83.8%)。
10. 人の痛みや苦しみを、柔道に武術・武技 (人を殺傷する) の側面があることを理解するために、絞技を学習する必要性はあると回答した者が多かった (142名、88.8%)。

以上のことから、柔道の授業における絞技の教育効果があることが示唆された。今後、絞技の学習によって、相手の立場を考えて行動できる能力を高められるかを検証する必要がある。また、柔道の絞技に教育効果があると思わない者や分からない者が少なからずいたことから、今後、中学校や高校の柔道の授業における絞技の導入は慎重に検討する必要がある。

文献

- 醍醐敏郎 (2001) スポーツVコース 柔道教室 (37版). 大修館書店, pp.162-164.
- 林弘典 (2017) 実践柔道論. 小俣幸嗣 (編著). メディアパル, pp.82-97.
- 林弘典・石川美久・田中勤・生田秀和 (2021) 中学校・高校の柔道授業の提案に対する学習者の考えについて. 関西武道学研究, 30 (1) : 3-12.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2022a) 今後の中学生・高校生における柔道授業の検討: 中学校・高校の柔道授業を経験した大学生における男女別の比較. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 19 : 9-17.
- 林弘典・石川美久・生田秀和 (2022b) 保健体育科教員を養成する大学の柔道授業に対する提案 (3) : 大外刈り・絞技・関節技・試合の指導. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 19 : 77-86.
- JAPAN SPORT COUNCIL (online) 学校事故事例検索データベース. https://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/anzen_school/tabid/822/Default.aspx (参照日2022年11月5日).
- 講道館 (online 1) 柔道 技名称一覧. <http://kodokanjudoinstitut.org/waza/list/#a2-4> (参照日2022年11月5日).
- 講道館 (online 2) 活動. <http://kodokanjudoinstitut.org/activity/> (参照日2022年11月5日).
- 小俣幸嗣 (2004) 柔道上達BOOK一本をとる!. 成美堂出版, pp.108-109.
- 文部科学省 (2016) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編・保健編 (4版). 東山書房, pp.143-167.
- 文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領解説 保健体育編 (5版). 東山書房, pp.135-155.
- 中林信二 (2007) 武道のすすめ. 島津書房.
- 日本スポーツ協会 (2020) Reference Book. 日本スポーツ協会, pp.103-110.
- 生田秀和・石川美久・林弘典 (2021) 中学校・高校の柔道授業における学習者の経験した指導内容について. 関西武道学研究, 30 (1) : 13-20.
- 竹内善徳 (1988) 図解 柔道の教室 4版. 北隆館, pp.166-167.

田中守・東憲一・藤堂良明・村田直樹（2000）武道を知る．不昧堂出版，pp.11-44.

内田良（2013）柔道事故．河出書房新社.

全日本柔道連盟（2019）「小学生の柔道重大事故の根絶に向けて」（通知・活動指針）．<https://www.judo.or.jp/news/763/>（参照日2022年11月5日）.

全日本柔道連盟（online）事故報告書について．<https://www.judo.or.jp/coach-referee/accident-report/>（参照日2022年11月5日）.